

- naries: A pilot study on how Japanese EFL learners differ in using dictionaries." *Language Education & Technology* 40: 61-79.
- Koyama, Toshiko and Osamu Takeuchi. 2004a. "Comparing electronic and printed dictionaries: How the difference affected EFL learning." *JACET Bulletin* 38: 33-46.
- Koyama, Toshiko and Osamu Takeuchi. 2004b. "How look-up frequency affects EFL learning?: An empirical study on the use of handheld-electronic dictionaries." *Proceedings of CLaSIC 2004*, 1018-24.
- Koyama, Toshiko and Osamu Takeuchi. 2005. "Does an assigned task result in better retention of words?: Two empirical studies on hand-held electronic dictionaries." *Language Education & Technology* 42: 119-32.
- Masuda, Hideo, et al. 2005. "An analysis of *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*, eleventh edition." *Lexicon* 35: 185-253.
- Minamide, Kosei. 1995. "Seigengoi ni yoru teigi to sono mondaiten [Definitions written with a defining vocabulary and their problems]." *The English Teachers' Magazine* 44/3: 78-9.
- Osaki, Satsuki, et al. 2003. "Electronic dictionary vs. paper dictionary: Accessing the appropriate meaning, reading comprehension and retention". In Minoru Murata, Shigeru Yamada & Yukio Tono (eds.) *Dictionaries and Language Learning: How can Dictionaries Help Human & Machine Learning?* (Papers Submitted to the Third ASIALEX Biennial International Conference). Urayasu: Meikai University, 205-12.
- Wells, John C. 1999. "LPD pronunciation preference survey 1998: Concise findings, listed alphabetically." <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells/concise-results.pdf> 2005. 12. 30.
- Winkler, Brigit. 2001. "Students working with an English learners' dictionary on CD-ROM" Papers from the ITMELT 2001 Conference. <http://elc.polyu.edu.hk/conference/papers2001/winkler.htm> 2005. 12. 30.

私の郷里，私の英語学習

東 信行

郷里は紀伊半島東南部にある。名古屋を列車で出て、伊勢平野を南へ向かう。松坂辺りを過ぎるところから山の風景が続く。山間を走り、伊勢と紀州を隔てるいくつものトンネルを次々に下ってスピードが落ち始めると、初めて海が左側の車窓に飛び込んでくる。停車駅は紀伊長島。特急で約2時間。町名は紀北町であるが、これは近年の市町村合併が私の古里にも及んだ結果の改称で、昨秋(2005)のことである。

私は伊勢路といわれる熊野古道沿いの山を背にした家に昭和10年に生まれた。それは「荷坂峠」を越えて紀国に入る移動手段に代わるものとして、トンネルを掘りぬいて紀勢東線が開通したのが昭和5年のことであるから、地域の人々が名古屋・東京との距離の短縮を実体験したころであろうか。この熊野古道は、江戸期には紀州藩が参勤交代に使った道と聞く。さらに古く平安の時代から和歌山側の紀伊路と並ぶ熊野詣のためのルートでもあった。一昨年(2004)のことになるが、こうした参詣道が紀伊山地の霊場とともに世界遺産に登録された。道としては、スペインのサンチャゴへの道に続く2例目とのことである。長い間教育長として活躍し、熊野古道の書き物をいろいろと届けてくれる高校時代の友人がいるが、最近は古道を歩く人も多くなっているそうで、私も誘われている。彼の著した本からの一節を引く。「現在でも、良く晴れた日、[荷坂峠]コース途中の沖見平からの眺めは眼下に群青の熊野灘と入り組んだ大小の入り江、そして、点在する島々の織り成す光景が江戸時代の道中紀の挿絵さながらに展開しているのを見ることができる。」

私が生まれてしばらくすると、家族で大阪の郊外に移り住むことになった。日本が太平洋戦争に突入して間もないころ入学した小学校は、龍華国民学校と呼ばれていた。おぼろげな記憶になるが、通学には3,40分はかかっていたであろう。学校の近くには聖徳太子の古戦場があった。やがて戦況が厳しくなってくる。我が家も古里へ引き揚げる。昭和19年の春のことで、小学3年から

は高校卒業までまた山と海の町で過ごした。

田舎町とはいえ、次々にいろいろなことが起こった。台風は珍しくはないが、地震となると別である。昭和19年12月の東南海地震では、熊野海岸が大津波に襲われ、人家の倒壊流失が多数に上ったし、2年後にも南海大地震があった。また米軍のB29が初めて青い空に白い飛行機雲をなびかせてからは連日のように空襲警報を耳にするようになった。尾鷲上空を通過して名古屋・大阪に向かう敵機である。海辺の山村も通過点では済まなかった。ある日物凄い轟音とともに吹っ飛ばされるほどの衝撃を受けた。私の家からは前方に山があって、海が見えないが、海につながる周囲千数百メートルの池が近くにあって、向い側の水際に数発の爆弾が落ちたのであった。えぐられた山肌と一面に腹を見せて死んでいる魚の異様な光景を後で見ることになる。駅前の百メートルほどの商店街に続いて小学校があったが、焼夷弾で帯がほぼ全焼した。鉄橋への爆弾投下や列車を狙った機銃掃射の話もあった。一時期は青空教室と校庭を掘り返しての南瓜や芋づくりの日々であった。

敗戦は小学4年のときで、新制中学には最初の1年生として入学する。町の反対側にある学校まで相当の距離を草履履きで通っていたが、そのうちに自転車通学に代わった。アメリカの影響下の学制改革は、片田舎の実情にそぐわなかったであろうが、中学では選択科目の英語を学ぶことになる。私にはこの新科目は苦手であった。もともと物覚えがよくないのである。幸い英語は高校入試科目ではなかった。

高等学校へは、駅まで自転車で、次いで終点の尾鷲まで40分ほど汽車に乗って通った(紀勢本線の全通は昭和34年)。英語はテストによるクラス分けがあったりして、ますます心の重荷となる。2学期に入ってから、何かの拍子に学友から1冊の参考書を借りた。古谷専三著『古谷メソッドによる英語入門』である。ほぼ一気に読み終えた。これがきっかけとなって、英語に関心を寄せることになる。2年生になると旺文社の通信教育で、中学の英語をやり直す。古谷氏が書かれた山海堂や績文堂の本だけでなく、ほかの英語の本や雑誌も読むようになった。その結果、主要科目の中で最も出来の悪かった英語が逆転し、外語を志望校に含めるに至る。

『英語入門』は、ごく限られた英文を使って品詞の文中における働きと文の構成を繰り返し解き明かす方法をとっている。説明が多く、記憶力に頼れない自分にはぴったりくるものがあった。その徹底振りによって英文をとらえる確かな枠組みを教えられた気がした。構文感覚が身に付きだすと単語類の記憶もあまり負担ではなくなった。汽車通生として通ういつもの仲間が車中で単語の

記憶を確かめるためによくテストをしてくれたものである。赤尾好夫の「豆単」ではなく「総合的研究」の方を使った。古谷氏は97歳で亡くなられるまで著作を続けられた。晩年の本を発行した「たかち出版」の海野二三夫さんから私にも昭和50年代半ばに参考書を書くようにというお勧めがあったが、辞書の仕事などで余裕がなかった。

4,5年前にインターネットで「古谷メソッド」を使った通信教育があるのを知って驚いたことがある。また最近古谷氏のご子息が「古谷メソッド」を謳った入門書を出版された。小学校に英語が科目として導入されるような世の動きの中で、どれほどの影響力をもつものか。ともかく私の田舎での英語学習は、「正則」からは程遠いものであった。